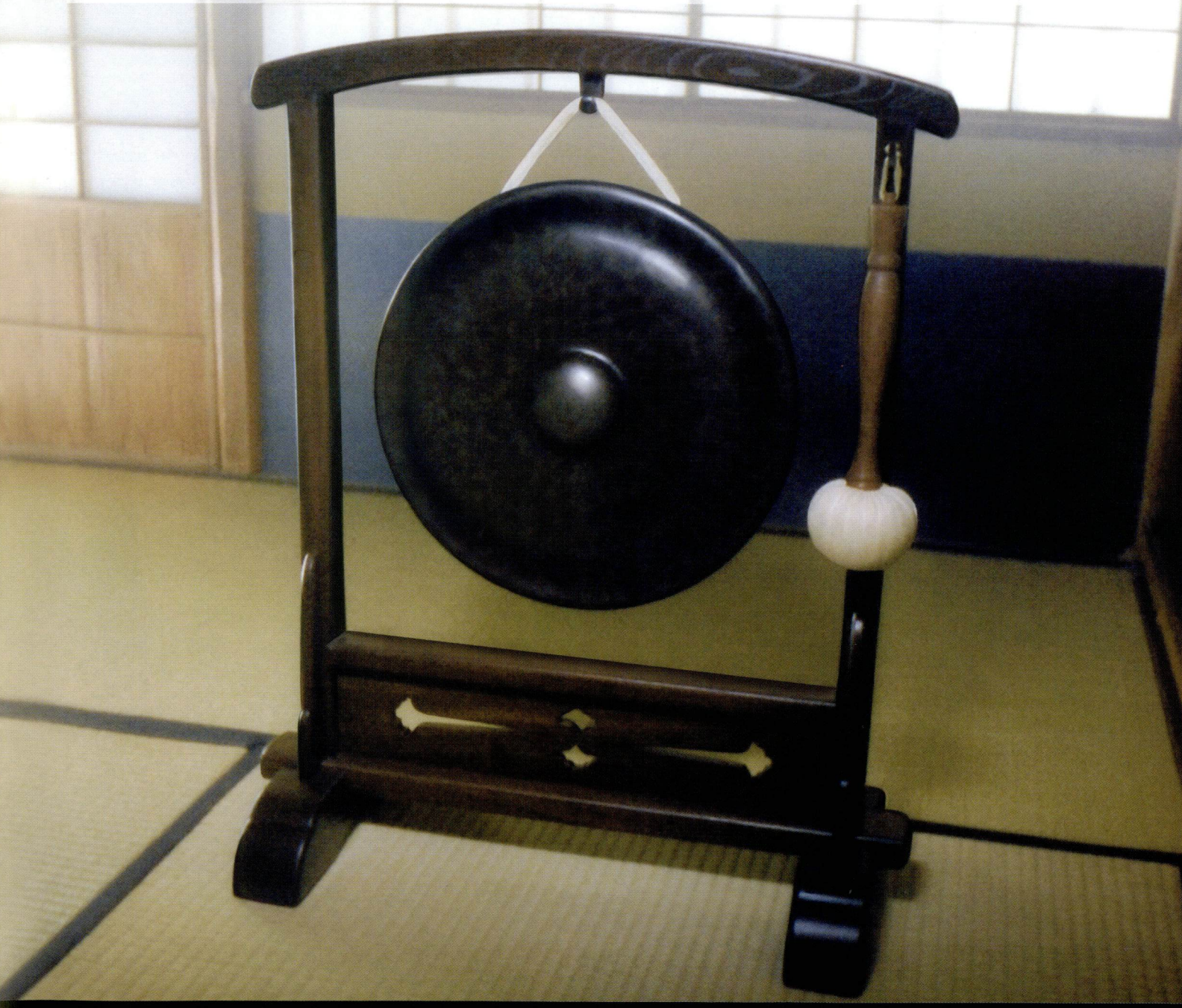
# 銅鑼（どら） －三代魚住為楽（さんだいうおずみいらく）のわざ－

平成 17 年度 工芸技術記録映画　35 ミリ・カラー・34 分　企画 文化庁　製作 日経映像

銅鑼はアジアで生まれた音響具。日本には中国大陸より伝わり、現在も、法会や茶会において、客の送迎時の合図に鳴らされている。重要無形文化財「銅鑼」（各個認定）保持者の三代魚住為楽は、祖父・初代魚住為楽のわざを継承し、姿・音色・余韻ともに優れた銅鑼を制作している。この映画は、素材の準備から完成まで、銅鑼の制作工程の全てを丁寧に描写した貴重な映像作品となった。



## 三代 魚住為楽（さんだい うおずみいらく）

昭和 12 年 石川県金沢市生まれ。本名・魚住安彦。
祖父の初代魚住為楽に師事。日本伝統工芸展で昭和 37 年文化財保護委員会委員長賞、平成 10 年文部大臣賞を受賞。その間平成 8 年に伝統文化ポーラ特賞受賞。平成 12 年に紫綬褒章、石川県文化功労賞を受け、同 14 年重要無形文化財「銅鑼」（各個認定）保持者に認定される。

## 三代魚住為楽の銅鑼

三代魚住為楽の制作した銅鑼が画面いっぱいに登場する。銅鑼は古くは仏教寺院で使われ、現代においては主に茶席等で用いられている。

## 銅鑼の起源

はるか古の時、中国や朝鮮半島、東南アジアなどの人々は、戦いや航海の折りに銅鑼を鳴らし、仲間の心を奮い立たせたという。

## 工房の三代魚住為楽

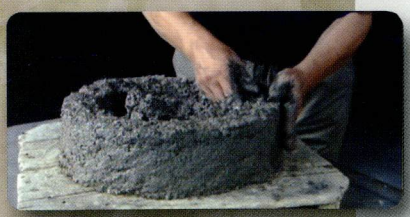
平成14年、銅鑼制作の技で国の重要無形文化財保持者に認定された三代魚住為楽。銅と錫の合金の「砂張」を材料として作る銅鑼が、茶の湯に相応しい音色を生み出すことを願って、魚住は叩く。

## 石川県金沢市

江戸時代から茶の湯が盛んであった金沢は、加賀前田家の城下町。その古い金沢の町の中心部に、魚住為楽の仕事場がある。

## 原型作り

銅鑼制作は、粘土で原型を作ることから始まる。
粘土に籾殻を混ぜてよく練り込み銅鑼の鋳型となる原型を作っていく。



## 籾殻の役割

原型作りで籾殻を練り込むには理由がある。鋳込みの前の段階で鋳型を素焼きすると籾殻が灰となってそこに小さな穴が生じ、やがて鋳込みをする時、ガスを逃がす働きをするからである。

## 原型を素焼にする

籾殻と粘土で出来た銅鑼の原型を、炭火の中に入れて素焼にする。この後に、原型の形を整える「型回し」の作業が待っている。

## 完成した銅鑼の原型

型回しで形を整えた原型に微妙な凹凸をつけて、完成後の銅鑼の音色に柔らかな響きをもたらすよう工夫する。原型のサイズは、一尺二寸、およそ36センチメートル。

## 銅鑼の蠟貼り

11月。蠟貼りの作業が始まる。1ミリの厚さに伸ばした蠟をぬるま湯に浸して柔らかくし、原型に貼り付けていく。夏には蠟が溶けて柔らかくなり、冬には固くなり過ぎ作業が困難になるので、銅鑼は気候の適した春と秋にしか制作できない。

## 鋳型の完成

さらに原型の上から土をかける。この土が外型、原型が中子となり鋳型が完成する。土の水分を吸い取らせるために、素焼の陶片「すわし」を全面に付ける。乾燥した鋳型は脱蠟を待つ。

## 銅と錫の計量

砂張の合金を作る材料の計量をする。材料は、銅と錫。割合は、銅100に対して、錫30である。

## 銅を坩堝に入れる

工房の中の炉では、坩堝で銅と錫を鎔かし合金「砂張」作りが始まっている。まず、融点の高い銅から先に鎔かし始める。銅の融点は1,380℃。

## 錫を坩堝に入れる

比較的低温で鎔ける錫を後から坩堝に入れる。鋳込みのタイミングは、坩堝の中で合金が鎔ける色合いを観察して魚住自身の目と勘が決める。

## 鋳型の脱蠟

いよいよ、鋳込みの準備に入る。まず、炭火で鋳型を加熱することで鋳型の中の蠟を溶かし、脱蠟する。脱蠟した鋳型が、鋳込みに適した温度まで冷めるタイミングを待つ。

## 鋳込みの瞬間

鋳込みの瞬間。砂張の温度を色で見極める作業のため工房は真っ暗のままだ。魚住が鋳型を支える。長男安信が湯口に鎔けた砂張を注ぐ。

## 型ばらし

型ばらしをしてみて、砂張で出来た銅鑼の本体を見るまでは、成功か失敗かは分からない。わずかなひび一つで銅鑼作りは台無しとなる。

## 焼入れと鈍（なま）し

無事、鋳込みが成功した銅鑼は、焼入れ、鈍し、仕上げの工程を経て完成となる。

## 仕上げ

完成間近となった銅鑼。漆掛け、炭研ぎ、御歯黒（おはぐろ）、そして、最後の油磨きの段階に至る。魚住の手が、まるで我が子を慈しむように銅鑼を磨いていく。

## 初鳴らし

初鳴らしの時を迎えた。
三代魚住為楽が、銅鑼を鳴らす。
茶室の空気を静かに震わせ、銅鑼の音が伝わる。

## 待合（まちあい）の客

茶室の外、露地の待合で待つ客に、銅鑼の音が席入りを知らせる。

## 銅鑼の音色

幽玄な銅鑼の音が、余韻を残して響く。


**協力**
石澤良昭
金沢市立中村記念美術館
東京国立博物館

**スタッフ**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 製作 | / 佐野文男 | 撮影助手 | / 吉田貴彦 | 語り / | 山本 學 |
| 構成・演出 | / 黒崎洋一 | 音楽・効果 | / 山崎茂之 | | |
| 撮影 | / 大木大介 | カラリスト | / 関口正人 | | |
| 照明 | / 古屋 熱 | タイミング | / 三橋雅之 | 録音 / | 東京テレビセンター |
| VE | / 千葉清美 | ミキサー | / 門倉 徹 | 技術 / | イマジカ |